

# 「もっと “REAL” の追求を」

“Cool Japan” という言葉がある。  
 海外から見たとき、  
 日本の文化はカッコ良いらしい。

では、日本人よりも日本文化に精通し、  
 海外の知見もある方が、  
 日本そして公共放送を  
 日本国内から見たときどう映るのか。

日本に暮らして 25 年。  
 NHK はもとより民放の番組でも  
 幅広い知識と教養を披露する  
 東京大学大学院教授のロバート・キャンベル氏に  
 話を聞いた。



## ロバート・キャンベル 東京大学大学院教授

### プロフィール

1957 年生まれ。アメリカ出身の日本文学者。東京大学大学院教授。専門は近世文学、特に江戸中期から明治初期の漢文学、芸術や思想など。ハーバード大学大学院博士課程修了。

### 歴史の紐解きはジャーナリズムに似ている

——江戸文学を専門にされた理由は。

日本に興味を持ったのは高校時代からだったんですが、最初は明治・大正から昭和の文学が面白かったんです。でも読み進めていくと、夏目漱石、樋口一葉、泉鏡花<sup>※1</sup>なんかもそうですけど、構造そのものが近代とは違うことに気付いたんです。文章のなかにある笑いだったり、ちよつとした言い回しだったり、一つ一つは生き生きと活写されているんだけれども、起承転結がものすごくはつきりしていない。すごく異質。「江戸的」という風言われるんだけど、彼らが読んできた江戸時代の人情本とか草双紙<sup>※2</sup>とかいうものが作品に色濃く影を落としているんですね。

ですので、そういうものを紐解かないと、彼らの作品の世界は観賞できないですし、翻訳するにしてもできないなど。それで、少しずつ時代を遡っていったら文化文政期にたどり着いて、その時代から明治初期までのトラジエクトリー<sup>※3</sup>が面白くって、そこに落ち着いたんです。それと、漢詩とか漢文を中心とした言説というのは極端に研究者が少ないんです。おもしろいし、いろいろな文化につながっているのに、日本の近代という歴史的な産物のなかで捨てられていったということに、外国人だったからかもしれないけれど気が付いた。

研究に関して私はすごく強欲だと思っただけで、批評や論評だけではなく発見を経験したいんですよ。そして、発見したことの意味を位置づけたいんです。文学のなかには、我々とは異なる価値観が歴史文書以上に明晰に刻まれている。行動、振る舞い、絆の作り方。役に立つとは限らないけど、過去から学ぶことは必ずあるだろうし、それ

いま放送に求められる「ジャーナリズム」

放送ジャーナリズムを問う

「うつつ(現実)」を映す

放送の持ちこたえる可能性

多様性を追求するカタチ

をきちんと解釈をして文章化でも講演でもいいので、それを表現することが研究者としての仕事の理想型ですね。

——どのように江戸時代の素材の真贋を見極め考察を加えているのですか。

虚実皮膜<sup>※4</sup>という言い方がありますね。皮膜によって虚が実が変わっていく。嘘のなかに人を救う実(まこと)とこのがある。これは江戸時代の常識なんです。だから、江戸文学にはトリックがいっぱいある。それを読み極めるというか極めるといふ感覚と技術が問われているんですね。だから、「これは信じてもいい」とか、「これこそ原点だ」とか思っていると「見立て」であつたりすることもあるわけです。たとえば、「忠臣蔵」は江戸の赤穂浪士の事件なわけですが、実は、



その中には楠木正成のいろいろな伝説なんか織り交ぜてあつたりして、さらに、それを紐解くと、また、違う伝説になつていたり……。でも、その虚と虚の間に実はあるというか。多重であり重層であるからこそ、そこに人間の真実

があり、それこそ人間だと思ふんですね。だからこそ、いい材料、いい対象に巡り会つて、真剣につきあつていくことが大事だと思うのです。

難しいのは、何が大事で何が大事じゃないかという、「本物」を見分ける感覚を数多くの「本物」と出会つて培うこと。これは経験でしかない。でも、そのためには、やっぱり自分がどのくらいの他のことをやっているか。いつも違うことを、違う気圧のなかでやる。そして、岩の下を覗いたときに、微生物なんかがいって、それを面白いと思えるか。トレーニングです。私たちが言えば、研究なんだけれども、研究以外でいろいろな自分の感覚を育んでいくなかで作られるものだと思います。

——我々の作業と似ていますね。

文系の基礎的な文系学、文系基礎学と言われるものは、それは変わらないと思ふんですよ。東アジア的に言うところの訓詁注釈<sup>※5</sup>、なんですけど、古いものをいいものを、もうほんとうに刺繍を刺していくように注釈を加えて、それがどういうものかということのいろいろな角度からそれをとらえて位置づけて、そしてそれを表現していく、伝えていく。古書の文字が判読できたとして、そこに書かれている事柄と意味を考察していくことで、そのテキストが持っている呼吸力が出てくる。一見の読者には見えない、響き具合とか周波数とか。そこからとんでもないことに気付かされることとがある。だから、森とか地平線を見ているんだけど、あの枝の上にごんな動物がいて、小川の石を覆すと、どういふ虫が生きているかとか、細かいところも見えていくことが基本だと思ふんですね。

※1 「泉鏡花」明治後期から昭和初期にかけて活躍した小説家。尾崎紅葉に師事し、近代における幻想文学の先駆者として評価される。主要作品は『夜行巡査』、『高野聖』。

※2 「草双紙」

江戸時代中期から江戸で出版された絵入り娯楽本、『赤本(昔話なし)』、『黒本(歴史物語、恋愛物など)』、『青本(色恋遊郭、滑稽ものなど)』、『黄表紙(青本から飛躍した知識層向けの文芸作品)』、『合巻(長編化した黄表紙)』の総称。

※3 「トラジエクトリー」 trajectory 弾道・曲線

※4 「虚実皮膜」事実と虚構の微妙な接点に芸術の真実があるとする論。江戸時代、近松門左衛門が唱えたこととされる。

※5 「訓詁注釈」古い言葉の字句の意義を解釈すること。

※6 「東洲斎写楽」寛政6年(1794年)から翌年にかけて10か月の間におよそ145点余りの錦絵を残した浮世絵師。生没年、出身地が長きにわたり不詳だったが、現在では阿波の能役者、斎藤十郎兵衛だとする説が有力視されている。

※7 「坂の上の雲」司馬遼太郎の歴史長篇小説。松山出身の正岡子規、軍人の秋山好古、真之兄弟の3人を軸に明治維新から日露戦争勝利までが描かれている。

## 研究者から見た歴史番組

——研究者から見て歴史番組はどのように映っていますか。

割と決まった構文というか、そういう文法みたいなものがある、決まったところから撮ろうとしているのかなと思っただけですね。王権とか家族の物語であったり、あとは権力の物語の裏側としての庶民の営みであったり。何か歴史小説、時代小説という感じがするんですね。面白いんだけど、でも、本当の歴史の面白さ、リアルな点を衝いているのかなど。

たとえば、東洲斎写楽<sup>※6</sup>という絵師がいますよね。「写楽が誰か？」という話は日本ではずっと、1つの産業のようになっている。これは視聴者を引きつけますし、非常に面白い。でも、その一方で、学術的には写楽の正体は四国の下級武士で能楽師である斎藤十郎兵衛だという可能性が極めて高いことも分かっている。だとすれば、斎藤十郎兵衛にもうちよつとこだわる、なぜ、下級武士は副業をしなければならなかったのか、それもなぜ、浮世絵をやったのか。あるいは、なぜ匿名にしないといけなかったのかとか。この問題は結局、「写楽が誰か？」という謎の根本と重なったりするわけですね。

そういう意味では、どこに見るポイントを置くかによって引き出し方が変わってくるわけです。私の同僚で中世の経済史をやっている、貨幣にもすごく詳しい人がいて、そればかりやっている。彼の関心は春日局とか茶々とかいわゆる大河ドラマの主役になるような人とかには直結しないんだけど、貨幣の鑄造や流通を通すと当時の世の中が見えてくる。だからもし、私がディレクターだったら貨幣から女性の生活を見るところも面白いんじゃないかなあ。

NHKの番組で言えば、私は大河ドラマなんかもすごく好きで頑張っていると思うんだけど、なんかNHKはやっぱり国民的になろうというか、国民的だろうというか……。『坂の上の雲』<sup>※7</sup>なんかも、すごくきれいな映像を作っているんだけど、何か国民的なおいさがすごくするんですね。まあ、アメリカだったらもつとひどい、たぶんナショナルリストなものに作っていくと思うんですけども。

## アメリカと日本のメディア比較

——アメリカの話が出たのでアメリカのメディアについて教えてください。

アメリカにはすべてを覆うようなネットワーク、国営あるいは公共放送があるわけではないんですね。強いて公共放送的なものをあげるなら、パブリック・ブロード・サービス<sup>※8</sup>というのがあって私の育ったニューヨークでは非常にあと、よく知られているのは3大あるいは4大ネットワーク<sup>※9</sup>と呼ばれる放送局があるんですが、それぞれ非常に政治的な色合いがついている放送を出しています。特にFOX<sup>※10</sup>というのは非常に政治的に固まった偏ったところがあったりします。

——ということは、それぞれの放送を見比べて自分で読み解く、いわゆるメディアリテラシー<sup>※11</sup>がないと大変ですね。その辺、アメリカ人は高い。

いえ、その逆でアメリカ人のメディアリテラシーはすごく劣化していると思うんですよ。たとえば、昔は「ニューヨークタイムズ」<sup>※12</sup>と「ウォールストリート・ジャーナル」<sup>※13</sup>両方を購読しているビジネスマンがいっぱいいたんだけど、いまは一つしか読まない。特にネットの普及で、気

※8 「パブリック・ブロード・サービス (PBS)」 アメリカ合衆国で会員数349のテレビ放送局を有する、非営利・公共放送ネットワーク。本部はバージニア州アーリントン。連邦政府や州の交付金、寄付金、広告ないしは企業寄付等で運営されており、主に教育番組や教養番組の放送を行っている。

※9 「アメリカ4大ネットワーク」 ABC、CBS、NBCの米3大ネットワークにFOXを加えたもの。

※10 「FOX」

政治的には一貫して共和党支持の報道を行う放送局。「24」や「プリズンブレイク」などを制作。

※11 「メディアリテラシー」 P56参照

※12 「ニューヨークタイムズ」

本社ニューヨーク。新聞社並びに同社が発行している日刊新聞紙の呼称。国内発行部数はUSATODAY、ウォールストリート・ジャーナルに次いで第3位。全国紙ではない。

※13 「ウォールストリート・ジャーナル」 ニューヨークで発行される日刊新聞。全米各地や世界の経済活動、金融に関するニュース記事に掲載し国際的な影響力を持つ。

持ちのいいとか波長があうというような言説の人と共鳴してしまうような、そのまま受け身になってしまっている。日本と違ってニュースソースとしては、大手のメディアではない形のウェブサイトもたくさんあるんですけど、ほとんどの人は、それを見比べないんです。だから、いま、オバマ大統領の国籍に根拠がないと信じている人が20、30%もいるわけですよ。いまは、メディアの転換期だからなのかも知れませんが、非常に偏重を増長させているように感じています。

——なるほど。その一方で日本の放送というのは一律化しすぎていて独自色が薄い気がします。これも弊害が生まれるような気がしますが。

確かに。例えば、朝日と日テレがもつと離れてても良さそうですが、そうではないですね。それは、ある意味では危険かも知れませんが、これは、私が番組に出演したり、企画をしたりすることもあって痛感するのは、日本のテレビ、特に民放ですが、IQをあげないようにしている感じがする。つまり、スマートにし過ぎると数字が取れない、数字が下がるといふ。分かりやすいといふのを人が感じなければまずいという。「あれ？」といふものは作りにくい。そういう意味では、NHKはまだまだ健全で引っかかりを作っている。つまり、「ちょっとわからない。だけど面白い」といふものがある。

たとえば『祝女』<sup>※14</sup>という番組に、同棲しているカップルのショートドラマがあるんですけど、男性がすごく情けない。だけど、その情けなさは素として見せているのか、あるいは、演じているのか。すごく微妙に演出がされている。ただゆるくいい加減に作っているんじゃないだろうけど、

「うん？」といふ、それがすごくリアルなんだよね。そういう意味でも、引っかかりをつけるといふのは考えさせるわけだから大事。こういう場だからってNHKを褒めてるつもりはないんですけど（笑）。

——公共放送はアメリカではないものですが、好意的に捉えて頂いていると思つてよろしいのでしょうか。

来日当初は受信料を払うのは、ちょっと嫌だなあと（笑）。留学生だったしお金が全然なかったから。でも、スポンサーというのがないといふのはやっぱり大事だなあと思つて。日本はすごく災害が多いですね。本当に毎年のように周期的にいろいろ全ての人がある一定の一つの情報源に耳と目を傾けないといけない状況の中では、これはやっぱり一つのスタンダードといふものがあつて、そのスタンダードを維持して行くために、みんながカンパをして行くという感覚には割と早く納得した気はしますね。

ただ、その一方で、以前からずっと感じるんだけど、非常に国民的な、地域的にも年齢的にもすべてあらゆる公約数の中にいないといけないので、リスクに対しては非常に消極的といふか、あまり背負わないといふことは感じますね。だから非常に丸く収める、あまりとんがったことはしない。安全圏をいくといふか、イギリスやヨーロッパ、アメリカのテレビと比べて視聴者をとにかく不愉快にさせない。それは大人だと思つて、そのとおりだとも思いませんけれども、もう少しそこを大局的に見てやつてもいいんじゃないか。もう少し冒険して踏み込んで社会の状況をありのままに描写して提示するといふことをやっていくのは大切かなといふふうに思います。

※14 『祝女』  
NHK総合で放送されているバラエティドラマ。女の本音や本性をテーマにしたオムニバス形式の笑えるショートストーリー集。

## 求められているのは「リアル」

——NHKの放送は必ずしも社会の状況を反映していない、一面しか見せていないということでしょうか。

この前、私も出演させて頂いたんですけど『日本の、これから』<sup>※15</sup> についてありますよね。「失業」や「就職難」を取り上げて、三宅民夫さんがものすごく名司会で面白かったんですけど、私も、「日本を元気にしよう」ということが、大前提で…。しかも、それも成功してるといっていいことなんだけれども、じゃあ、実態がどうなのかというと、若い人たちのこの現状っていうものを、もうちょっと掘り下げないとそれは救われない。

たとえば、去年の12月の時点で大学生の就職内定率は68%しかない。要するに半分近くの人が12月の時点で、まだ内定をもらっていない。それが、どうしてでてくるのかって考えたとき、やっぱり、私たちが選んでいるシステムについてというのが彼らを犠牲にしているという認識を持たないといけない。

個人的に思っているのは、若い人は上の世代の古いシステムの中で、本当にアンフェアな時代を送っていると思うんですよね。閉塞感があるわけですよ。欧米や韓国に比べたら

起業家もないし潰されてしまうケースも多い。そういうことが起きると、若者はやっぱり馬鹿馬鹿しい気持ちになって、やらないわけですよ。かといって、組織の中で20代の人たちが力を発揮できるかというところではない。

それから私はね、私のことはどうでもいいんですけど、東大は65歳が定年で東大の先生たちの多くは私立に天下っていくんですね。私は、それがね、やっぱりみつともないと思うのですよね。「老害」ですよ。だから、私はしない。

老人たちも困っているからバランスは大事なのは分かっていますけど、大事だとは思っているだけども、若い人たちを暴れさせるというか、もうちょっと暴られるような空間をつくらないと。本当にいろいろなことを若者たちが自分の足で立つというか、選択できるような世の中を、そのスペースをつくらないと窒息することになるのは間違いないと思いますね。

そういう意味では、日本はすごく大変な岐路に立っているとと思うんですね。日本がこれからの数年間で、どうなっていくかということが決まる。そういう視点からも放送は若者を日本の組織に抗うような人生をけしかけていくことができなかなあと。トップランナーを見せるだけでは、それは啓蒙的には面白いと思うんですけど、それだけではいけない。すぎ間を、日本社会のすぎ間を若い人たちに少し気付けさせるって言うか。時にはどん底に落とすような番組があってもいいと思う。そうしないと、若者たちの心には落ちていけない。

描くとすればリアルに、とにかくリアルに。実は若者たちっていうのはもっと深く、リアルな世界をきちんと見ているんです。たとえば、マンガにしてもものすごくハードなもの好まれている。産業廃棄物が舞台で若い人が搾取



※15 『日本の、これから』 NHKのスタジオで日本が直面している様々な問題を、一般市民と有識者として議論する討論番組。2011年2月終了。

され、弱い人同士がイジメあったりするようなものとか。NHKではやっているかも知れませんが、もともと突っ込んで欲しい。そして、それを総合でガツンと正面から捉えてリアルにやって欲しい。

そして、結論を提示するのではなく、もう少し状況を丁寧<sup>16</sup>に検証する。結論そのものではなく、どうすれば打開できるかということ投げかけて欲しいですね。

## インタビューを聞いて

当日、キャンベルさんは何やら小脇に抱えてやってきました。「ついさつき古本屋で手に入れてきた」「これは良い品です」と、まるで子どもが新しいおもちゃを手に入れたかのような満面の笑みを浮かべて見せてくださったのは江戸末期の古書。中身を見せていただくと…恥ずかしながらも、キャンベルさんの解説がちょっと加わると、これが実におもしろい。まさにプロフェッショナル・インタビュアー<sup>※16</sup>。そして、キャンベルさんのお話を聞いていると、江戸と現在のインタビュアーであるだけではなく、日本とアメリカあるいは学生と社会人のインタビュアーでもあるわけです。

ふと振り返れば、私たち取材者も事象を読み解き視聴者に伝えるインタビュアー。でも、私たちが「良質」なインタビュアーであるかということを問われたとき、どれだけ自信を持ってYESと言えるでしょうか。テレビ離れが進んでいると言われますが、キャンベルさんの指摘にあっ

たように、視聴者が本物を見極める力を身につけてきており、小手先の技術や演出では通用しなくなってきたのではないのでしょうか。たとえお笑い番組であってもフアンイではなく、ひょっとしたらインタレストなものを提供しなければいけない時代になっているのかもしれない。

事象の『REAL(リアル)』を追求し伝えるためにも、私たちは真の意味でリアル・インタビュアーにならなければならぬと強く感じました。

報告 中央放送渉外部長 竹内哲哉

※16 「インタビュアー  
= Interpreter」  
通訳者、解説者、説明者、  
演出家のほか、米語には  
史跡ガイド。